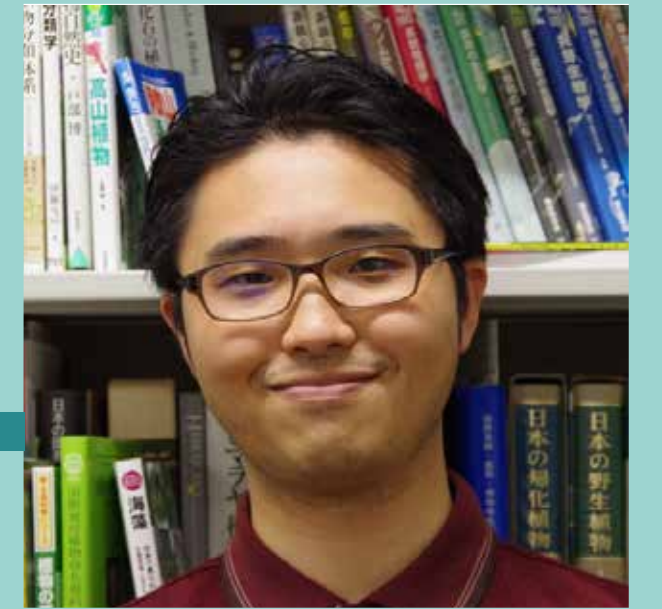


ツユクサ科の分類学@ひとはく3年目 イボクサ属の花の奇妙な進化

自然・環境評価研究部 系統分類研究グループ

李 忠建



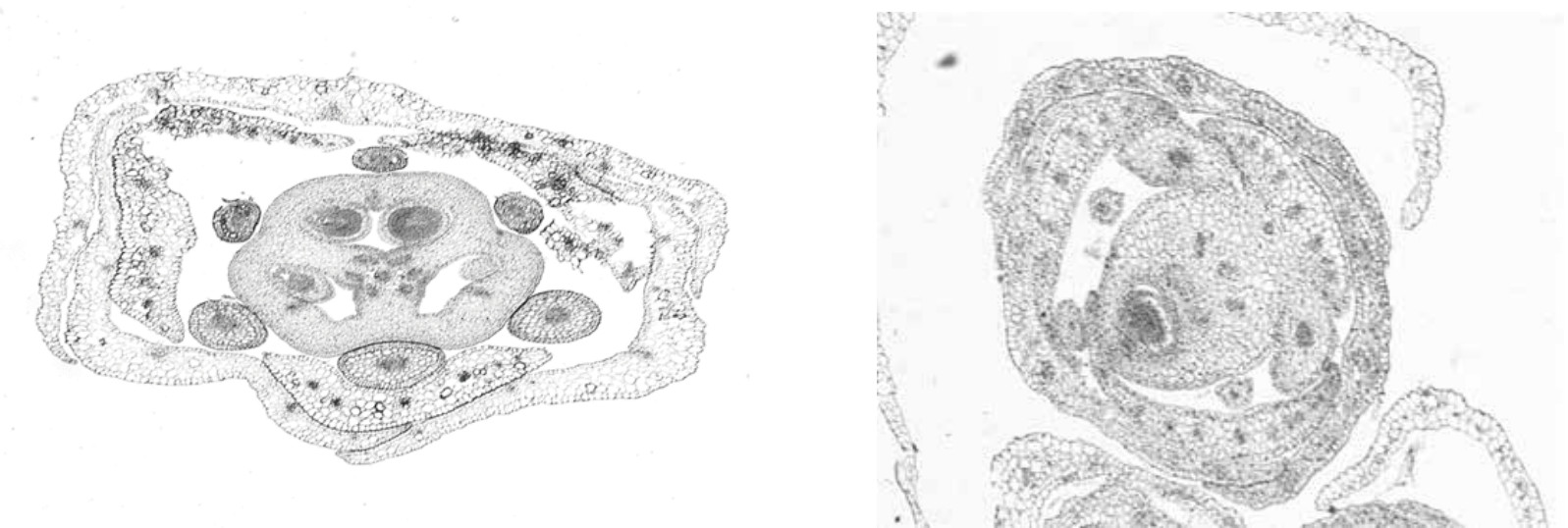
ツユクサ科イボクサ属といえば、日本では水田雑草のイボクサばかり見かけますが、世界を見ると約60種が知られるところ大きな分類群になっています。イボクサ属は6本の雄しべを持ちますが、そのうちがく片に対生する3本だけが花粉を生産し、花弁に対生する3本は花粉を出さない「仮雄しべ」になっており、これがイボクサ属の最大の特徴になっています。

しかし、外来のアレチイボクサなど、花粉を出す雄しべが1本少なく、仮雄しべが4本になる種類も複数あり、これらは花が左右相称になることが知られています。道端で見かけるツユクサなど、イボクサ属に近縁なグループの多くは左右相称ですが、どのような関係があるのでしょうか。

アジア産種のDNAや形態を調べたことで、イボクサ属は多様化以前に左右相称でなくなりましたが、その後特定のグループで再び左右相称に変化したことがわかりました。また、左右相称のイボクサ属は、近縁なグループとは異なる対称軸（60°回転している）を持っていることがわかり、ツユクサ科の中で奇妙な存在であることが確かめられました。



左：イボクサ、右：アレチイボクサ。どちらも大きな雄しべで花粉を作り、小さい仮雄しべは花粉を作らない。イボクサは対称軸が複数あるが、アレチイボクサは1つのみ。



左：ヤブミョウガ、右：シマイボクサ。ヤブミョウガは一般的なツユクサ科と同じ対称軸だが、シマイボクサは斜め。